

う畑がつらなり、「ワインは国の王様の大切な財産であって、ぶどうの出来ない国に王様は自国のワインを高々と売りつけて財をなしていた」とヨーロッパを廻った時ガイドのフランス人は美しいフランス語で語ってくれました（残念ですがフランス語は分りません。通訳がきます）

ドイツのハイデルベルク城には大きな大きなワインの樽があり、今は観光客がそのぐるりのラセン階段を昇ったり降りたりしています。やはり機械化とともにぶどうを足で踏んで拵えていた時代は過ぎて、この見事な檜の木でつくられた大樽も今はただ見せるものになってしまったのでしょうか。

フランスではビールよりワインが安くて私達は食事の度にワインを飲み、ローストビーフやおいしい生ハムなどを食べました。ワインもその国のお料理を共にとればおいしいのですが日本に帰ればやはり湯豆腐の一片に添うものは日本のお酒であらねばならず国土と民情を育てるお酒、と私帰って来て改めて思いました。

酒をつくる途中、泡が高く高く沸く時期があります。もともとの量の倍程にも泡が沸きます。真白に、輝やくように、真夏の積乱雲のように盛り上って来て、そのままおけば噴きこぼれます。これを夜中じゅう起きていて、廻り廻りに泡を消して廻る役があります。大きな五尺の桶のふちに上り、竹を束ねたものでサッサッと泡の表面を切るのです。これを泡番といいました。

泡番の一人に寒き夜更けかな  
泡番に泡のさゝやく寒夜かな

泡は沸く時も消える時も小さな声を出します。私はその頃こんな句をつくりましたが、今はこんな仕事は無くなり、したがってこんな句の浮ぶ情景は見られなくなりました。大きな大きなタンクは五尺の桶の四五倍の容量で、口はマンホール式になり泡は沸いてもふきこぼれる事はなくなりました。人が無駄な労力を払わないですむようになり、実用化し、近代化して、良いには良いのですが酒造りの情緒というものは本当に無くなりました。が、そう云うものでしょう。情緒を楽しんでいる時でもありません。何しろ月の面を人が歩く時代です。月みれば千々にもこそ楽しけれ、などという事はいわれなくなりました時ですから……

（随筆家）

## 龍角散人

高田素次

古くから知られている薬があるが、大正の中頃、この薬によってのち拾いをしたというので、みずから龍角散人と称した人がいた。

この人は、もと筑前秋月の藩士井上掃一の長男として、秋月城下に生れた人だが、明治の初め、税務官吏であった父親と共に、今の吉市南泉田町に移り住み、父の死後は、母を伴って球磨郡湯前村に転住、村長の菊池武義に見出されて、村役場に勤めるかたわら、「白扇会報」という俳句の雑誌を主宰し、長崎の田中田士英や、豊後高田の高井左川や、宮崎の杉田作郎と共に、九州俳壇の四天王といわれた人である。

本名は井上藤太郎だったが、尾崎紅葉の小説「枯華微笑」からとって付けた「微笑」という名前で俳壇には通っていた。夏目漱石に師事し、最後まで定型を守り通した人で、河東碧梧桐が新傾向に走り、九州行脚に出かけた時などは、青木月斗はわざわざ書を送り、「球磨川は天下の勝なり、微笑は天下の俳人なり、碧梧桐と逢へば大るに俳論でもやるべし。引合せも何もいらばこそ」といった程であった。

後年、洪川玄耳は彼を球磨の山中にくすばらせてしまうことを惜しみ、しきりに上京をすすめたが、彼は頑としてきかず、あくまでも球磨のぬしになるのだと称して「くま山人」と名乗り、また住んでいた所が二本柿という部落だったため、自分の家を双柿舎と名づけ、別号を二本柿生ともいって動かなかったのだ。

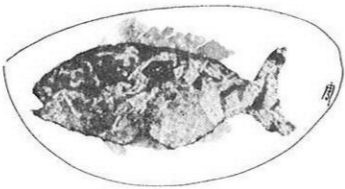
ところで、大正八年十月、肋膜炎をおこして熊本県立病院で手術を受け入院中、母危篤の電報を受けると、取るものも取り敢えず、倉皇として退院、ゴム管を胸につけたまま馳け戻ったが、その翌朝、母は到々不帰の客となってしまうたのであった。

夏帽子畳に投げなげきけり

がその時の句であるが、そのまま家にとどまり静養をつづけるうち、すすめられて服用をはじめてよくなった。つれづれのままに習いはじめた俳画に用い出した雅号が龍角散人というのであった。

それにしても、四人の女と結婚し、三人の女と別れながら、一人の子供も恵まれなかったのだから、神さまも少しはいたずらが過ぎたようである。それでも、昭和十一年六月十二日に七十歳で亡くなると、湯前村はわざわざ緊急村会を開いて、彼が四十余年間も村役場につくした功をたたえ、特に村葬の礼をとったのは全く前例のないことであった。

然し、没後三十五年をたった今、生前の住家はとりこわされ、屋敷跡は畑となり、生垣の杉だけが荒れ放題に荒れ、墓にはまだ石塔も建てられず、母の墓と並んだその土塚さえも定かではなくなりつつあるのは、何としても痛ましい。せめて、小さな石塔だけでも建てあげたらと、よりより話には出るのだが、血縁の唯一人もないさびしさは、市房おろしよりもかなしく、その土塚すれすれまでに他家の墓が建てられた現状では、たとえこの土塚の上に石塔を建てたとしても、到底その前にはひざまずく余地さえありそうにない。せめて遺稿集の出版でも思っていた矢先、免田町の遍照寺住職で、同じく湯前町出身の井上快龍師によって、二本柿の旧居跡に、「井上微笑旧居跡」の立派な碑石が建設されたことは、まさに晴天のへきれきであった。これを機会に、龍角散人俳画展や遺稿集出版を希望するという声が強まりつつあるのは喜ばしいことで、せひとも成功させたいものだと思っている。（郷土史家）



## 正月の風習

大塚正文

昔の人は一年をいくつかの節に分けて、それぞれ祝ったが、正月はその最初の節としてとくにめでたい日とされてきた。気分を一新させ、生活に夢と希望をもたせようという折り返し目であるからである。

以下主として、ひと昔まえの菊池市菊池の正月の風習について書いてみる。  
年が明けると、寝正月といわれるように、朝早く起きることをきらった。早く起きて戸をあけると、福の神が逃げいかれるからという。これには、農家や商家にとっては一年中忙しいので、この日だけはゆっくり休もうという意味あいがふくまれている。「ふくよし」が来てからでないと起きることはできないといわれていたので、これが来てから起きる。やがて、福よしが「福よし、福よし、米の倉にも、金の倉にも、福よし、福よし」と威勢よく流してくる。（福よしは、えはうしのような三角帽子をかぶって、のしのような模様のはいた袖の長いを着ている。おともがかまげをいのうており、米やもちをもちとそれに入れる。）そうすると起きるわけであるが、まず若水をくむ。これは男が必ずくむものとなっていた。それから、ぞうんをつくってたべる。なお、元日は家の中を掃くことはできないといわれていた。（早く起きて戸をあけるという理由と同じ意味からである。）

二日は「初おこし」といって朝早く起きていた。暗いうちから起きて、男はナワナイ、女は裁縫などの初仕事をやる。三日はヨケで休んだ。四日は、「四日山」といって、オトコシ（下男）などが馬を引いて山にたきを取りに行く。山から帰ってくると、あと